

Gide-Mauriac 往復書簡について

(Ⅳ)

中 島 公 子

さて、いよいよ1928年の到来である。
まず問題のG書簡から、見ることにしよう。

XVII G から M ⁽¹⁾ へ

1928年 4 月 24 日

*……ce compromis rassurant qui permettre d'aimer Dieu sans perdre
de vue Mammon……*

『ジャン・ラシーヌ⁽²⁾』を頂いたのはあなたから直接ではなかったのでしょう、何の献辞も付いていませんから。しかしとにかくこれをお書きになったことにお礼申し上げてもよいでしょう。ほんとうにこれはみごとな本です（現今の作品類を形容するのに、この言葉はめったに使わないのですが）。これがどれほど私に感銘を与えたか、申すまでもありますまい。あなたは執筆中度々私のことを思い浮かべたことが読み取れるようにしてくださいましたから。そう、偉人といわれる人の仮面を剥ぐ仕事をどんなに私が喜ばしく思っていることか。偶像の胸像にくらべたら何だってましです。「中傷だ」などというスーディ⁽³⁾は放っておきましょう。ただあなたの手から、ラシーヌがおそろしく小さくなって、あるいは少なくとも後光が薄れて出て来たこと

を認めましょう。あなたの人間認識はここでおそらくあなたのどの小説よりも進んでおり、私としては『宿命』の不安な作者よりも『ラシーヌ』の作者その人の方が好ましいように思います。

ちょっとした指摘をしてもかまいませんか？ あなたは（132ページで）こう書いておられますね—《筋とは逆に、フェードルの悩みよりも罪のかかるものはない》と。しかし友よ、この恋愛の近親相姦的性格を弱めたところで（擬似的な近親相姦だという点ではまったく同感ですが）、フェードルの情念が不倫であることに変わりはないのを忘れてはなりません。少し先で《きわめて普通の恋愛》と呼んでおられるのはこれをさしているのでしょうか？ この点に関してのあなたの論旨の展開はすべてきわめて面白いが、同時に間違いにもなり得るでしょう。誤った根拠から出発しているのが惜しまれます。

私はまだ全巻を読み終えないうちに以上のすべてを書き綴ってきました。終りの数章も前のに劣らず結構です。それどころかおそらく最上の、とにかくきわめて巧緻な筆使いです。しかしとりわけ最終章は、かなりの留保をつけなくてはなりません。私の不安について語っておられる個所ですが、あそこは間違いですよ。友よ、不安は私の側にはない、あなたの方にこそあるのです。愛情をこめてクローデルを悲しませたのはここです。つまり私は悩める者ではないのです。

あなたの作品を読むことによって、私はこのことをかつてないほどよく理解しました。それからまたあなたの中にあるもっともキリスト教的なものが、まさしくこの不安であるということも。だがあなたがもっともらしい考えを幾重にも積み重ねても、老い行くラシーヌのキリスト教徒としての観点と、あなたのキリスト教小説家としての観点とは対立するほどに異なっています。ラシーヌは、書かなかったことにしたいと希い、焼く^{わが}とまで口にした彼の悲劇作品にも拘らず、彼がふたたび神のものとされるよう神が望み拾うたことを感謝しています。（なぜなら彼は、これを読んでとびあがったマシスよりも、《悪魔の協力のはいらない芸術作品はない》ことを、よく理解し

ていたからです。) あなたは、神がラシーヌをふたたび捕えるまえに、戯曲を書く時間を残してくださったこと、彼の改宗にも拘らず残してくださったことを喜んでおられるのだ。要するにあなたが求めておいでなのは『宿命』を書く許しです。そしてそのことがあの作品をあなたに書かせたのであり、従ってあの作品を取り消す必要はないわけです。以上すべてのこと（黄金神を見失わないまま、神を愛することを許してくれる安心な二股道）、あなたの顔にはあれほどの魅力を与え、お書きになる物にはあれほどの味わいを生む、かの慥悩する良心は、これあるが故にわれわれの目にふれるのです。そしてそれは、罪と言えばまったく怯気をふるうくせに、もう罪にはかかり合わなくてよいと言えばがっかりするであろう人達をえらく喜ばせてくれるはずのものです。文学とはこういうもので成り立っていること、とりわけあなたの文学がそうであることを、あなたは知りすぎるほど知っておられる。そしてあなたは文学者たることを止めるほど十分にキリスト者ではない。

あなたのすぐれた芸術は読者をあなたの共犯にします。あなたの小説は罪人をキリスト教に導くよりも、キリスト教徒に、地上には天とはちがった物があることを想起させるのに適しています。

私はかつてこう書いてある人々の大憤激をくりました—《悪しき文学を作るのは美しい感情によってだ》と。モーリヤック君、あなたの文学はみごとです。もしも私がもっとキリスト教徒だったら、おそらくこんなあなたについてはこれなかったことでしょう。敬 具

モーリヤックは批評に弱い作家と言われている。「これほど批評を気にする作家はいない」と言ったのは Claude-Edmonde-Magny⁽⁵⁾ だが、もちろんすべての批評を気にしては作品など書けはしないし、Mもそんな気弱な作家だったわけではない。しかし C-E-Magny にそう言わしめるほどMが深刻に受けとめた批評は生涯に二つあった。一つはこの1928年4月24日付のG書簡、もう一つは Jean-Paul Sartre の《M. François Mauriac et la liberté (フランソワ・モーリヤック氏と自由) 1939》⁽⁶⁾ である。Sartre の批評は、社会的意義という

点ではGのそれよりはるかに大きい、M個人にとってみれば、すでに確立した文学的地位をおびやかすというものではなく、また新しい文学観によって裁断されたMは19世紀以来の小説の技術的発達の到達点として、いわば数多くのフランス心理小説の代表として組上に上がったのであり、この批評で彼の内面が脅やかされるといった性質のもでなかったことは確かである。しかしGの批評はMの内面を衝いていた。前稿で見たように、1922年の《*Le Baiser au Lépreux*（癩者への接吻）》以来、身のうちから湧き上がる制作欲にまかせて一気に坂道を駆け上がり、不朽の作品と言ってよい《*Thérèse Desqueyieux*（テレーズ・デスケルー）1927》をいまでも世に送り出した、得意の絶頂にあるMの内面にわだかまる、M自身にも明確でない、ある〈曖昧さ〉を衝いたので、これはMに冷水を浴びせた。いわゆる1928年の〈危機〉とよばれるMの苦悩の時期の導火線となったことは、これまでに度々言及した通りである。それも、批評の名手Gの狡猾な技巧によって最大級の讃辞とともに贈られたこの〈毒〉は、あとで見るように即座には効力をあらわさず、そのうち次第にMの体内で破壊的な力を発揮して行った。しかしその〈毒〉について述べるより先に、まずここで問題とされている《*La Vie de Jean Racine*（ジャン・ラシーヌの生涯）1927》がどのような作品であるかを見る必要があるであろう。

《*La Vie de Jean Racine*（ジャン・ラシーヌの生涯）》は、1927年12月から《*La Revue universelle*》誌に掲載され、翌28年3月に、Plon社より刊行された。4月24日というG書簡の日付は、この作品に対するGの並々ならぬ関心を示すものであろう。Mには後の新聞論説をのぞけば、〈批評〉という分野の作品はあまり多くはない。しかし、この《ラシーヌ》のように〈評伝〉の形をとったものは、どれも傑れている。人間を描くことに秀でたMの才能が十分に発揮されるからで、G書簡にも賞讃されている通りである。《ラシーヌ》の成功によって自信を得て、《*Pascal et sa sœur Jacqueline*（パスカルとその妹ジャクリーヌ）1931》、《*La Vie de Jesus*（イエスの生涯）1936》という二つの傑作を彼は世に送り出したのだった。様々な要素を含むかなり長篇の評伝を要約

するのはいささか乱暴だが、G書簡に関連するところを中心に、Mのラシーヌ観とはどのようなものであったかを紹介しよう。

1677年、40歳をわずかに越えたばかり、俗にいう油の乗り切った時期にあったはずの J. Racine は、その最高傑作とも言うべき《*Phèdre* (フェードル)》の上演のあと、突然劇作の筆を折って引退してしまった。ルイ十四世の修史官の職につき、それまで浮名を立てた華やかな女優たちとはうって変った地味な財務官の娘と結婚し、以後20年間、敬虔なキリスト教徒としてまた2男3女のよき父親として平凡な生涯を送った。この引退・沈黙の理由については今日までさまざまな説がある。Mの《ラシーヌ》もその主たる目的はその引退の謎の解明にあり、彼はいわゆる〈改宗説〉をとっている。Racine の信仰が、劇作を罪深い行為として拒けることを彼にうながしたとする説である。Port-Royal des Champs のジャンセニスト達と劇作家との関係——Racine は幼少から彼らと深い繋がりがあったが、劇作中は激しく対立して、引退と同時に和解した——が重要視される。のちに異端として壊滅させられたとはいえ、大パスカルをもその陣営に擁したこの17世紀最大の宗教集団は、当時の知識人達に高い倫理性を要求して、今日では想像もつかないほどの大きな影響を及ぼした。しかしMの言葉を借りれば、ことはジャンセニズムという狭い領域の問題ではなく、「人間のさまざまな情念を描かなくてはならないカトリック作家の戦い」⁽⁷⁾がこの大劇作家の内面を領していたのであった。

3歳で孤児となった Racine が、親戚達の加わる Port-Royal の学校で、Lancelot, Nicols, Antoine Le Maitre, M. Hamon らによって、聖書学や詩篇と同時にギリシャ古典の手ほどきを受けたのは16歳から18歳までのことである。このもっとも感じやすい年齢に、肉体の蔑視、地上的なものや官能のたのしみを神に背く罪深い行為として恐れることを、徹底的に叩きこまれたことは、彼にとってきわめて複雑な影響を及ぼした、とMは見ている。この時期はまた「生まれたばかりの欲望が本能的にその対象を、特別根強い要求をもって求める時期」⁽⁸⁾であり、「ちらりとかいま見る生が何ともいえない豊かなものに映る時期」⁽⁹⁾でもあるからである。この世の美しさをもっとも強く感じる時期

に、この世の空しさに思いを到す矛盾——葛藤の種は早くもここに蒔かれているのである。

学園を去ってパリに出た孤児は、早々とこの世の魅力のとりことなる。宮廷に迎えられ、王に詩才を嘉^{よみ}され、俗界の華やかな風習に染まる。放埒も始まる。だがその心の一部に、こうした悦楽は罪であると囁く声は絶えない。旧師 Nicole の非難に対して若き Racine が示した苛立ちは、彼の〈不安〉の裏返しだ、と M は指摘している。

Nicole の非難というのは何か？ それは Racine 青年の素行のわるさをなじるといった性質のものでは全く無い。Racine その人を名指してもいいない。Nicole の匿名の弾劾文は、反 Port-Royal 派の文人 Marets de Saint-Sorlin を相手どったものだと言われているが、その中でこの宗教家は演劇や小説の不道德性を論難し、その公共に及ぼす影響を憂慮して次のような烈しい言葉を吐いたのである：

「小説の作り手や劇詩人は、身体ではなく信徒の靈魂の公共的毒殺者であり、無限の精神的殺人の罪科を負うものとして己れを見なくてはならぬ。この殺人を実際に彼が惹き起したにせよ、あるいは彼の危険な作品によって惹き起したにせよ。」⁽¹⁰⁾

〈毒殺者 empoisonneur〉とは厳しいことを言ったものだ。しかし、もし心の中に、自身〈劇作は罪悪なり〉という認識を抱いていなかったならば、芸術に無理解な一宗教家の、しかも Racine を名指したわけでもない批判に、そういきりたつ理由があろうか。Racine は応戦して二通の手紙を Nicole 宛に書くが友人達になだめられて二通めは発表をみあわせ、ますます劇作に打ちこみ、次々と傑作を生む。しかしその心の奥深く、この罪惡意識は彼の良心を傷つけていた。

ではなぜ劇作は罪なのだろうか？

Racine が舞台に繰りひろげたのは〈情熱恋愛〉のドラマである。情念そのものが白熱の焰となって自ら燃え、滅びて行くドラマである。M はこれを次のように解説している：

「ジャン・ラシーヌはわれわれのうちにあってはじめて恋の情念をあえて正面から直視したのであり、はじめて恋から虚飾をはぎとってみせたのである。そのことを彼の同時代人がなかなか納得できなかったのはおそらく、模倣すべからざる詩（ポエジー）の完璧性の故にである。あまりに完璧度が高いため、その詩はわれわれのうちにあらかじめ設けられていたかのように思われ、ラシーヌの或る詩句は、創られたのではなく発見されたかのようである。⁽¹¹⁾」

詩（ポエジー）の完璧性とは、技巧のことではない。作者自身の内面から湧き上がるものである。

「恋愛を描くわざを知る者にとり、外部に由来するものは何もない。われわれ自身の外に新しいものなどないのである。いかなる発見も、われわれのこの肉体上で行われる。……愛についての深遠な言葉はただの一語といえども、情熱をかけた一つの運命の代償なのである。⁽¹²⁾」

だがこれほど完璧に驅り上げられた恋の情念のもっとも感動的なところは、それが〈不幸〉な恋であるところにあるのではあるまいか。

「ラシーヌは根本的に、恋の情念を阻止され抑圧されるものとしかみなしでいなかったようである。たけり狂う波のようなものとして、常に打ち負かされるものとして。そこには盲目的な頑なさ、強大ではあるが泡となって消え去る空しい力だけがみてとれる。……ラシーヌのヒロインたちは、彼女らが恋にかられて駆けより、衝き当る障害の大きさに応じて実在化し、生命を持つのである。⁽¹³⁾」

いかにも、〈障害〉の大きさに応じて〈情念〉が高まり、純度を増し、運命と化すまでに昇華して行くのは古典悲劇の鉄則である。だが、ギリシャ悲劇において運命が人間の外部から課せられるものであるのに反して、ラシーヌ劇の〈障害〉は人間の内部にある。恋する者は、恋するというそのこと自体によって〈不幸〉であり、悲劇的である。Mは、ラシーヌ劇には幸福な恋人がほとんど存在しない、と言っている。そしてそれは、〈恋〉が〈悪〉だからだ、と述べるのである。フェードルに関する言葉ではあるが、これは他の多くのラシ

一ヌ劇の悲劇的ヒロイン達にある程度あてはまることであろう。

「ラシーヌはフェードルが彼の中で形作られて行く年月を通して彼女に、人間の幸福にとって宿命的な確信——肉体の愛は悪である、われわれが犯さざるをえない悪であるとの確信を抱かせたのである。」⁽¹⁴⁾（傍点筆者）

この断定にはジャンセニスト的な匂いがある。というよりジャンセニスムそのもののような響きがある。人間の恋がすべて全面的に〈悪〉であると断定するには、本来人間の情熱 (passion) は被造物にではなく、まず神に向けられねばならぬ、という前提が必要である。というより、ラシーヌ劇に盛られたほどの情熱、あれほどに純粋な、極限的な愛は、絶対者であり愛の根源であり極地である神に対してしか十全に燃えることはできない。対象を誤った愛は業火であり、受けとめる者のない空しい情念であって、それ自体滅びに至る〈悪〉である、ということでもあろうか。しかし、人間とは悲しい存在で、この悪を犯さずにはいられないのである。そこにラシーヌ的人間の宿命性、悲劇性がある。犯さざるをえない〈悪〉を、書かずにはいられないから書く——劇作はまぎれもない〈罪〉となる。Racine はその悪循環を、劇作そのものの筆を折ることによって断ち切ったのである。

以上のMによるラシーヌ伝の特徴は、それが Racine の生涯の外的事件の羅列とは対蹠的な〈内面の記録〉であることにありと言えようが、そうした内部ドラマを追う場合にMが手がかりとしたのは、M自身の創作上の悩みそのものであった。Mは Racine に自分自身を重ね合わせることによって彼の心の深い部分に迫ろうとしたのである。

Mの Fayard 版の全集第8巻の序文に、そのことがわかりやすく述べられているので引用してみよう：

「古典主義の人々の中で私は彼ら（ラシーヌとパスカル）以外に師を持たない。そして彼らが私の師であったとすれば、それはまず私が彼らの中に兄弟を認めたからである。と言っても、ここで彼らと私の間に偉大さの関連づけをしようなどとは自惚れていない。私は彼らが落ちこんだ深淵を自分に照らして押し測るのだ。だがわれわれが同じ家族に属していることは、私の眼

からすれば明らかな事実である。おかしなことにパスカルからラシーヌへと目を移すと、その似ていないことがまず目につく。ところが私はその両方に近く感じられるのだ。おそらくパスカルより多くラシーヌに接近して。実際あまりにも身近であるために、彼の生涯を書くに当って私が援用した思い上がりも甚だしい方法——たえず私自身の生いたち、私の個人的なドラマを思い浮かべるという方法——は有効にはたらいだ。私自身から目を離さないとはいっても、むしろ問題は常にラシーヌその人のことである。事実ラシーヌと同様中流のブルジョワ家庭に生まれた私は、彼と同じように、異常に強い感受性の目覚めの時期から早くも、強度に張りつめた宗教的雰囲気に従わせられ、そこに浸されたのである。だがこの種の人間をして神を愛するよう仕向けるものは、同じくその人間をして〈この世の甘美にして罪深き慣習〉にも赴かせる。心痛にも、過失にも、恐怖戦慄にも、そして落雷のごとき恩寵の現れにも鋭敏ならしめるのである。人間の種々の情念を描くことにひきずりこまれたカトリック作家の戦いを、私に先立ってラシーヌは味わった。彼の相手は、私がお叱りを受ける破目になったペトレヘム神父ほど単純ではなかったが。……このラシーヌ伝の成功は肝心なところ、私が内面からこの作家に接近することができたという点に負っている。そして類推を頼りに、おそらく彼の他の伝記作家より容易にその謎にはいって行くことができたという
(15)
点に。」

生い立ち——というより、思春期に受けた宗教教育の呪縛的影響、文学の道での成功と同時に始まる現世的なものの魅力への開眼、人間の情念をとことんまで追求することによって人間の真実を虚飾なく描こうとするその態度、要するに創作する者の中にある、作家と信仰者の二律背反が、MとRacineを結びつけた共通項であることがよくわかる。Charles du Bosが《カトリック小説家の問題》と名づけたものである。後にMはこの問題を次のような言葉で説明している：

「カトリック作家は二つの深淵に挟まれた狭い稜線の上を歩んでいる：人

を罪に誘わないこと、しかし偽わらないこと、肉欲を刺戟しないこと、しかしながら人生の真の姿を歪めないよう用心すること。」

また《*La Vie de Jean Racine*》の中にも、次のような文章が見うけられる：

「彼によって破滅した魂、彼がこの世からいなくなった後において破滅するであろう魂の強迫観念は、あらゆるカトリック作家と同様にラシーヌにもつきまとう⁽¹⁶⁾。」

Mは Nicole の〈毒殺者〉説すなわち、演劇や小説即犯罪となす思想を、あらゆるカトリック作家が蒙らなくてはならない批判とみなしているのであり、事実M自身、小説が成功をおさめると比例して、カトリック教会側から強い批判を受けるようになってきたところであった。Mが Fayard 版の序文で〈お叱りを蒙った〉と述べている Bethléem 神父というのは、キリスト教徒の善導を目的とした雑誌《*Revue de Lectures*（読書誌）》の中で次のようにM作品にレッテルを貼った人物である：

「火の河——不穩当、不健全、
ジェニトリクス——奇怪、病的、
愛の砂漠——きわめて有害
テレーズ・デスケルー——道徳的に低し
宿命——きわめて不健全⁽¹⁷⁾」

つまりところ、善良なキリスト信者は、Mの小説など読んでではない、道徳的な悪影響甚大なりという評言である。Mの小説は官能描写が大胆すぎ、良俗を乱すおそれがある、というわけであった。

ただこのB神父の批評は描かれる世界そのもののひずみが問題とされている。その点底の浅い批判であり、あまり重大なものではない。文学の自立性を信じて、歯牙にもかけずにすまそうとすればすませる性質のものであった。これに対して、《*Art et Scolastique*（芸術とスコラ哲学）1920》の Jacques Maritain は、小説家の精神の内部に〈罪〉との馴れ合いがあることを指摘して問題をさらに深めたのである。

「本質的な問題は、小説家がしかじかの悪の外貌を描き得るか否かを知ることではない。この絵画を書くに当って彼がいかなる高さに身を保つかを知らることである。そしてそれを書くために彼の芸術と、その心が、馴れ合いなしにすませるに十分なほど清く、強くあるか否かを知ることである。近代小説家が人間の悲慘の中により深く下りて行くと、それにつれて小説家には超自然的な徳が多く要求される。それが描かれるべく要求する通りにブルーストの作品を書くためには、聖アウグスチヌスの内的光を必要としたでもあろう。残念にも、生み出されたものは反対のものだった。そしてわれわれは、観察者と観察されるもの、小説家とその主題とが墮落の競争をしているのを見るのである。」⁽¹⁹⁾

こうしたカトリック教会・思想界からの批判は、Mを微妙な立場に立たせていた。前にも述べたようにMはカトリック文学の若い旗手として文学的出発をした。しかし危険を避けて道徳的な顧慮ばかりしていたのでは人を感動させる文学は生まれない。少し前に、Gを〈*démoniaque*〉と評した Henri Massis に対して、人間の心のかくれた襞をたいまつで照らし出すことは小説家の使命だと言ってGを擁護したのはMである。だがMは決してカトリックの立場を捨てたわけではない。むしろ真理の聖性を愛するというキリスト教的立場が、反って汚れたもの、所謂〈神なき人間の悲慘〉を尊重するように命じているのであり、人生の真実を歪めず描くことによってそこを照らすべき恩寵の光を暗示するというのが、Mの方法論的主張なのである。

これに対してGの書簡は——そろそろここに立ち戻ってもよかろう——そういったMの方法論を真向から否定するものであった。カトリック作家という立場の曖昧さを衝き、Mの文学が彼の内部矛盾そのものによって生命を得ているものであること、Mは Racine のように〈撰択〉することを避けており、〈妥協〉によって葛藤をのがれようとしているが、そんな努力は所詮空しく、M自身「悪魔の協力のはいらない芸術作品はない」ことを率直に認めた方がよかろうと言って、キリスト教良心の呪縛からの脱却を暗にすすめたものであった。

「友よ、不安は私の側にはない、あなたの方にこそあるのです。

「あなたは、神がラシーヌをふたたび捕えるまえに、戯曲を書く時間を残してくださったこと、彼の改宗にも拘らず残してくださったことを喜んでおられる。

「黄金神^{モモン}を見失わないまま、神を愛することを許してくれる安心な二股道。

「あなたの小説は罪人をキリスト教に導くよりも、キリスト教徒に、地上には天とはちがった物があることを想起させるのに適しています。

「私はかつてこう書いてある人々の大憤激をくりました——《悪しき文学を作るのは美しい感情によってだ》と。モーリヤック君、あなたの文学はみごとです。もしも私がもっとキリスト教徒だったら、おそらくこんなにあなたについてはこれなかったことでしょう。」

こうしたGの言葉を並べてみると、Gがそうと明らかに言わず暗示しているものがはっきりと見えてくるように思われる。それは、Mにおける反カトリック的、異教要素の指摘である。GはMの内部の〈悪〉を称揚しているのである。

内部矛盾の長い道程の果てに〈不安〉を、すなわちキリスト教良心の呪縛を抜け出したGは、葛藤を内にかかえ、それを創作の原動力としているMの〈不安〉を誰よりもよく見抜いた。神以外のものに抗いがたく引きつけられる異教的自我に〈罪〉の臭いを嗅ぐ〈不安〉——自ら進んで悪をなす背徳の勇氣はなく、ただ悪を〈犯さずにいられないもの〉と認め、その魅惑に身をゆだねる臆病者の〈不安〉。

「要するにあなたが求めていらっしゃるのとは《宿命 (Destins)》を書く許しです。」

とGは言っているが、この小説作品には、Gの揶揄するMの曖昧さがどのように現れているのであろうか。

《Destins》はMの作品中とくに質的にすぐれたものではないが、20年代のMの小説が一樣に持っていた、息詰るような官能的生への渴きを全篇にみなぎらせた作品として印象に残るものである。

Élisabeth Gornac という中年の後家はあまり素行のよくない Bob という青年に惹かれているが、その感情は親戚の好意という仮面に隠されている。享樂的な Bob はこの叔母さんを本気で自分の対象と考えたことはなく、ただ彼女の好意を利用することばかり考えている。Élisabeth の内部では、家庭的道德的な女が、脹れあがった官能の愛を堰きとめており、交通事故で Bob が死ぬと同時に、この堰は破られる。Élisabeth の嘆きはなぜ Bob とともに汚れなかったか、なぜ情欲に身をまかせなかったかとの悔恨で占められるのである。一方、Bob はたった一度——おそらく生まれてはじめて——情欲ではない愛に心が息づくのを感じたことがある。その相手 Paule との間をむざんに裂いたものは神学生の卵 Pierre Gornac の告げ口で、これは後年《La Pharissienne (パリサイの女)》という典型に発展する宗教的独善の雛型である。〈魂のために〉よかれと思ってすることがまさにその魂を破滅させる偽善的信仰に対する攻撃の烈しさには目を見はらせるものがある。ある意味では無神論者の作品よりもずっと反教會的と言える。その官能的生の扱い方にしても、たとえば Colette⁽²⁰⁾ の名作《Chéri (シェリ) 1920》と比較した場合、Élisabeth が Léa のように肉体の愛にすべてを賭けた強さを持っていないこと、Bob が Chéri のようにこの初老の女を愛していないことは、反って肉欲をそれ自体のなまなましさにおいて描き出し、人間のうちにひそむ肉感性への憧憬を強く読者に印象づけるのである。

いまさらながら Andre Gide はすぐれた批評家であった。Mの内部矛盾をM以上にみごとに剔出した文章として、第十七書簡ははじめから〈批評〉、つまり公開を目的に書かれた。Gはこれを次の第十八書簡——公開状とする断りの手紙——とともにMに送ったが、そのときすでにこれは出版社に送ったもののコピーに過ぎなかったのである。

XVIII G から M⁽²¹⁾ へ

1928年5月10日

……en dépit des quelques restrictions……

親しい友よ、

あなたがパリに戻られたことを知りました。そこでこの手紙をお送りすることになります。他方、N. R. F の6月号に載ったのをお読みいただくことになりましょうが。あなたの御本に対する讃嘆を公衆に知らしめることを、悪いとは思いいなるまいと考えてのことです。あなたの考えにいくつか留保を付けてはいますが。私はあなたの《ラシーヌ》の値打ちを買い被ってはいません。嬉しいことに、これをすすめて読ませた相手の人達は私と気持を同じくしているのは見てとれますから。私は非常に多忙で、執筆や引越の思案に忙殺されていますが、それでもお目にかかれるなら嬉しく存じます。

変らぬ友誼をお信じください。

アンドレ・ジイド

P.-S. こんなコピーで失礼。うっかりして雑誌社に、あなた宛のもっと礼儀に合った書状を預けてしまったものですから。

書簡がMの目にふれるよりも先に N. R. F に渡ったのは、Gの〈不注意〉によるかのような言い方をしているが、はじめから公開状とする意図であったのは明らかであろう。Gはおそらく、Mがこれを読んだら公開を思いとどまるように頼んでくることを見越して、この拳に出たものと思われる。「いくつかの留保……」などととぼけているが、この〈留保〉の重大さをGが知らないはずはない。往復書簡の編者 Jacqueline Morton も、「この公開状の一こと一ことがMの立場のうさん臭さを念入りに検討した上でのものであった⁽²²⁾」と解説している。

Mはこの二つの書簡を読むと、すぐさま返信（第十九書簡）を送った。しかし、この書簡で見る限り、Mはまだ送られた矢にあまりよく気づいていないようである。切られた傷口はまだ血を噴き出してはいない。しかし、深い困惑は見てとることができる。そしてGに微笑を返そうとしても、そのほほえみが頬をこわばらせ、歪ませているように思われるのは筆者ひとりの思いこみであろうか。

XIX Mから G へ⁽²³⁾

[1928年 5月]

……*Il faudra bien que je m'explique un jour, sur ma position religieuse.*

このおたよりが印刷されたからといって、どうして私が喜ばないことがありますでしょう。おそらく何らかの回答が求められるでしょうね。嫌悪をもよおしながらでも、いつか私の宗教的立場についての釈明をしなくてはなりません。まず第一にこのことがあります——私はキリスト教をえらんだわけではない、キリスト教は生まれたときから——生まれる以前から——私に植えつけられていたのです。42歳となった今、私はこれを引き抜いてしまうことは決してあるまいということがはっきりわかります。パスカルの例の断片（うろ覚えに引用するのですが）をご記憶ですね——『人々が何と言ってもキリスト教にはけた外れなところがある——それはあなたがそこで生まれたからだ、と人は私に言うだろう。——いや、まさにその中で生まれたからこそ、それに楯をついているのだ、だがその中で生まれたにも拘らず……』マリタンやゲオンのような他の岸辺からきた人達は、この腹立たしさが理解できないのです。それが破壊できないものであることを知ればこそ、一層荒々しく私は柵を揺さぶるのです。私はあなたの心の安定など信じない、信じたくありません。キリスト教的見地からすれば、そんな安定はあなた自身への安易なゆだね方の証左、あなたに関する神の落胆の証左でしかないのです…

…しかし、にやりとなさるのが目に見えるようだ。あなたのような精神状態に私がどんなにやすやすとはいって行けるかご存じだったら！ そう、あなたのことが念頭にあったのです。いまもたえず念頭にあります。あなたのお取りになった態度決定は、現代世界においてはより一層悲劇的なものに思われます。あなたの〈場合^{ケース}〉は、私の心をとらえて放さないある意味を有しているのです。

お目にかからずにいたのは、お目にかかってもあなたの興味を引くとは思えなかったからです（いまでもそう思っています）。私は自分に照らしてそう判断するのです。その人をすばらしいと思っている場合でも、手のうちを全部見せられれば倦きてしまいますからね……あなたは袖の中にまだ一、二枚のカードを隠していらっしゃると、そう頑固に思い続けます……それから、私はあなたが大好きです。

『ジイドと福音書』についての小さな本にくださったおたよりに返事を差し上げませんでした。黙っているのは同意のしるしです。もっとも、こんなことは口にすべきではありませんね——きっと真実を裏切ることになりますから。『ラシーヌ』を好んでくださって有難うございます。ご存じのとおり、私の目にはあなたの讃辞以上に価値あるように思われるものはありません。一こと合図をくださったら喜んで馳せ参じましょう。

心からあなたの

F・モーリヤック

この書簡の中に予告された〈回答〉は一冊の書物の形をとる。Gの第十七書簡を付録とした《Dieu et Mammon（神と黄金神）》となって翌29年早々にCapitole社から刊行された。この中でMはGに指摘された立場の曖昧さを源泉にさかのぼって自己検証し、作家としての自我と信仰者としての自我、彼の内にすむ異教徒とキリスト者、肉と霊の葛藤を赤裸々に跡づけて行く。それはおそらく辛い仕事だったであろう。「嫌悪をもよおしながらでも……」というこの書簡中の言葉は、そこに味わう没^{もつやく}薬の味を暗示しているかのようだ。そのよう

な作業を公衆のまえで行うこと——その生剥ぎの苦しみに彼を誘ったGの書簡，とりわけこれが公開の形をとったことについて，Mの態度は微妙に変わって行ったようである。なぜなら，次の第二十書簡からうかがい知るところによれば，MはGの第十七書簡を《裏切り行為 (une perfidie)》と呼ぶようになって行った模様であるから。

(続)

引用・参考文献

- ① Cahier d'André Gide 2: *Correspondance André Gide-François Mauriac* 1912-1950, établie, présentée et annotée par Jacqueline Morton, Paris, Gallimard, 1971.
- ② François Mauriac: Œuvres Complètes tome VIII pp. 57-150. *La vie de Jean Racine*, Paris, Fayard, 1950.
- ③ *Chronologie* de Mauriac, établie par Jacques Petit. (1^{er} volume des Œuvres complètes, Bibl., de la Pléiade, 1978.)

註

(1) XVII.—GIDE A MAURIAC

Paris, le 24 avril 1928.

Ce n'est peut-être pas de vous directement que je tiens votre *Jean Racine*, car il ne porte aucune dédicace; mais du moins puis-je vous remercier de l'avoir écrit. C'est vraiment un livre admirable (je n'ai guère usé de ce mot pour qualifier des œuvres d'aujourd'hui). Sans doute est-il bien inutile de vous dire combien il me touche; vous avez bien voulu laisser connaître que parfois vous pensiez à moi en l'écrivant. Ah! combien je vous sais gré de décamoufler un grand homme. Tout vaut mieux que le buste-idole. Laissons Souday parler de «calomnie». Mais convenons que Racine sort terriblement diminué, ou du moins *désauréolé* d'entre vos mains. Votre connaissance de l'homme va plus avant, ici, que dans pas un de vos romans peut-être, et je crois que je préfère l'auteur de *Racine* même à l'inquiétant auteur de *Destins*.

Me permettez-vous une petite remarque? Vous écrivez (page 132): «En dépit de la fable, rien de moins criminel que le trouble de Phèdre». Mais, cher ami, même en atténuant le caractère incestueux de cet amour (faussement incestueux, je pense exactement comme vous sur

ce point) vous devriez n'oublier point que la passion de Phèdre n'en reste pas moins adultère. Est-ce là ce que vous appelez un peu plus loin : «le plus ordinaire amour»? Tout votre développement sur ce point est des plus intéressants et serait des plus justes. Dommage qu'il parte d'une fausse donnée.

J'écrivais tout ceci avant d'avoir achevé le volume. Vos derniers chapitres ne sont pas moins bons. Ce sont peut-être les meilleurs, au contraire ; les plus habiles en tout cas. Mais que de restrictions le dernier en particulier me force de faire. Lorsque vous parlez de mon inquiétude, il y a maldonne ; cher ami, l'inquiétude n'est pas de mon côté ; elle est du vôtre. C'est bien là ce qui désolait affectueusement Claudel : je ne suis pas un tourmenté ; je ne l'ai jamais mieux compris qu'en vous lisant, et que ce que vous avez de plus chrétien en vous, c'est bien précisément l'inquiétude. Mais, en dépit des replis de votre spécieuse pensée, le point de vue chrétien de Racine vieillissant et votre point de vue de romancier chrétien diffèrent jusqu'à s'opposer. Racine rend grâce à Dieu d'avoir bien voulu le reconnaître pour sien, *malgré* ses tragédies qu'il souhaitait n'avoir point écrites, qu'il parlait de brûler (car il comprenait beaucoup mieux que Massis cette phrase qui faisait, bien à tort, bondir celui-ci : «Il n'est pas d'œuvre d'art où n'entre la collaboration du démon»). Vous vous félicitez que Dieu, avant de ressaisir Racine, lui ait laissé le temps d'écrire ses pièces, de les écrire *malgré* sa conversion. En somme, ce que vous cherchez, c'est la permission d'écrire *Destins* ; et c'est ce qui vous les fait écrire de telle sorte que, bien que chrétien, vous n'avez pas à les désavouer. Tout cela (ce compromis rassurant qui permette d'aimer Dieu sans perdre de vue Mammon), tout cela nous vaut cette conscience angoissée qui donne tant d'attrait à votre visage, tant de saveur à vos écrits, et doit tant plaire à ceux qui, tout en abhorrant le péché, seraient bien désolés de n'avoir plus à s'occuper du péché. Vous savez de reste que c'en serait fait de la littérature, de la vôtre en particulier ; et vous n'êtes pas assez chrétien pour n'être plus littérateur.

Votre grand art est de faire de vos lecteurs vos complices. Vos romans sont moins propres à ramener des pécheurs au christianisme, qu'à rappeler aux chrétiens qu'il y a sur la terre autre chose que le ciel.

J'écrivis un jour, à la grande indignation de certains : «C'est avec les beaux sentiments qu'on fait de la mauvaise littérature». La vôtre est

excellente, cher Mauriac. Si j'étais plus chrétien, sans doute pourrais-je moins vous y suivre. Croyez-moi bien amicalement vôtre.

① pp. 75-77

- (2) *La Vie de Jean Racine*, Plon, 1928.
- (3) Paul Souday. *«Le Temps»* 紙の常連批評家。問題の批評は 1928 年 4 月 28^日 付, Jean Racine に関するもの。② p. 226.
- (4) *«Destins»* Grasset 1928.
- (5) Claude-Edmonde Magny: *Histoire du roman français depuis 1918*.
- (6) Jean-Paul Sartre: *«M. François Mauriac et la liberté»* N. R. F., février 1939.
- (7) Le débat de l'écrivain catholique entraîné à peindre les passions……
② p. 11.
- (8) ……l'instant même où le désir naissant cherche d'instinct son objet avec une tenace exigence. ② p. 63.
- (9) ……où la vie entrevue nous apparaît d'une richesse telle…… ② p. 63.
- (10) Un faiseur de romans et un poète de théâtre est un empoisonneur public, non des corps, mais des âmes des fidèles, qui se doit regarder comme coupable d'une infinité d'homicides spirituels, ou qu'il a causés en effet ou qu'il a pu causer par ses écrits pernicieux. ② p. 80.
- (11) ……Jean Racine, le premier chez nous, osa regarder en face les passions de l'amour; le premier, il dépouille l'amour de ses oripeaux; et ce qui détourna ses contemporains de s'en rendre compte, ce fut sans doute la perfection même d'une poésie inimitable; perfection si haute qu'elle nous paraît préétablie et qu'il semble que certains vers de Racine furent non pas inventés, mais découverts. ② p. 84.
- (12) A qui sut peindre l'amour, rien n'est venu de l'extérieur, rien de neuf ne s'observe en dehors de nous; toute découverte s'accomplit sur notre propre chair;……une seule parole profonde sur l'amour est le prix de tout un destin passionné. ② pp. 84-85.
- (13) Racine, semble-t-il, ne voit profondément la passion qu'arrêtée, que refoulée. Il n'en prend conscience que comme d'une vague toujours furieuse, toujours vaincue. ……Les héroïnes raciniennes prennent corps, prennent vie, en proportion de l'obstacle contre lequel leur passion se précipite et se brise. ② p. 98.
- (14) Racine communique à Phèdre, durant les années qu'elle se forme en lui, cette certitude fatale au bonheur humain, que l'amour charnel est

le mal, le mal que nous ne pouvons pas ne pas commettre. ② p. 100.

- (15) Parmi les classiques, je n'ai pas eu d'autres maîtres; et s'ils ont été mes maîtres, c'est que d'abord j'ai reconnu en eux des frères: non que je prétende ici établir entre nous un rapport de grandeur: je mesure l'abîme d'eux à moi; mais c'est un fait évident à mes yeux que nous appartenons à la même famille. L'étrange est que Pascal à Racine les dissemblances sautent d'abord aux yeux, alors que je me sens moi-même proche de l'un et de l'autre: plus près de Racine sans doute que de Pascal: — si près en vérité que la méthode présomptueuse à laquelle j'ai eu recours en écrivant sa vie, et qui était de penser sans cesse à ma propre histoire, à mon drame personnel, ne m'a pas mal servi. On n'y sent nulle part, me semble-t-il, l'arbitraire. C'est bien de Racine qu'il s'agit à chaque instant bien que je ne me perde pas de vue. Il est vrai que, né comme Racine dans une famille de bourgeoisie moyenne, j'ai été comme lui soumis, dès l'éveil d'une sensibilité folle, à une haute tension d'atmosphère religieuse, que j'en ai été également pénétré: mais ce qui prédispose un cœur de cette race à aimer Dieu, le prédispose également “à l'usage délicieux et criminel du monde”, aux déchirements, aux erreurs, aux terreurs, aux coups tonnants de la grâce. Le débat de l'écrivain catholique entraîné à peindre les passions, Racine en a souffert avant moi, s'il eut affaire à des abbés Bethléem moins simples que celui dont j'ai dû subir les foudres. (.....) La réussite de cette Vie de Racine est due essentiellement à ce que j'ai pu aborder mon auteur par le dedans et que, grâce à l'analogie, il m'a été donné peut-être dans son mystère plus aisément que ses autres biographes. ② pp. 10-11.
- (16) Cette hantise des âmes perdues par lui et celles qui se perdraient encore lorsqu'il ne serait plus du monde, possède Racine comme tout auteur catholique. ② p. 117.
- (17) Donat O'Donnell: *《Maria Cross》* (Imaginative Patterns in a Group of Modern Catholic Writers.) pp. 6-7.
- (18) Maritain については *《Gide-Mauriac 往復書簡について》* (Ⅲ)「明治大学教養論集」通巻160号, フランス文学, 1983, p. 43 参照。
- (19) “La question essentielle n'est pas de savoir si un remancier peut ou non peindre tel aspect du mal. La question essentielle est de savoir à quelle hauteur il se tient pour faire cette peinture, si son art et son cœur sont assez purs et assez forts pour le faire sans connivence. Plus le roman moderne descend dans la misère humaine, plus il exige du

romancer des vertus unhumaines. Pour écrire l'œuvre d'un Proust comme elle demandait à être écrite, il aurait fallu la lumière intérieure de saint Augustin. Hélas ! c'est le contraire qui se produit et nous voyons l'observateur et la chose observée, le romancier et son sujet en concurrence d'avilissement." "*Dien et Mammon*" in Œuvres complètes, Fayard, tome VII, p. 314.

(20) Colette, Sidonie-Gabrielle (1873-1954)

(21) XVIII.—GIDE A MAURIAC

Paris, le 10 mai 1928.

Mon cher ami,

J'apprends que vous êtes de retour à Paris. Je me décide donc à vous envoyer cette lettre, que d'autre part vous pourrez lire dans le numéro de juin de la N. R. F., car j'ai pensé que vous ne trouveriez pas mauvais que le fasse connaître au public mon admiration pour votre livre, en dépit des quelques restrictions que j'apporte à votre pensée. Je ne pense pas me surfaire la valeur de votre *Racine*, car je vois avec joie que mon sentiment est partagé par les quelques personnes à qui je le donne à lire. Si occupé que je sois, si surmené par le travail et par les soucis d'un déménagement, j'aurais bien grand plaisir à vous revoir.

Veuillez croire à mon affection bien fidèle.

André Gide.

P.-S.—Excusez cette copie, je me trouve par mégarde avoir confié à la revue les feuilles plus décentes qui vous étaient destinées.

① p. 77

(22)chaque mot de sa lettre ouverte ayant été soigneusement pesé pour mettre en évidence la fausseté de la position de Mauriac. ① p. 28.

(23) XIX.—MAURIAC A GIDE

[mai 1928]

Mon cher ami

Comment ne serais-je pas heureux de voir cette lettre imprimée!? Peut-être appellera-t-elle une réponse. Malgré la répugnance que

j'éprouve, il faudra bien que je m'explique un jour, sur ma position religieuse. Il y a d'abord ceci : je n'ai pas *choisi* le christianisme ; il m'a été inoculé dès ma naissance—et avant même que je sois né. A 42 ans, je suis assuré que je ne l'éliminerai jamais. Vous vous rappelez ce fragment de Pascal (je cite de mémoire) « On a beau dire, il y a de l'extraordinaire dans le christianisme—c'est parce que vous y êtes né, me dira-t-on... —Non, car justement parce que j'y suis né, je me gendarme contre ; mais bien que j'y sois né... etc. » Un *Maritain*, un *Ghéon*, venus de l'autre rive, ne peuvent comprendre cette fureur. Je secoue d'autant plus violemment les barreaux que je les sais indestructibles. Je ne crois pas, je ne veux pas croire à votre tranquillité. Du p[oint] d[e] v[ue] chrétien, elle serait le signe de l'abandon à vous-même—du découragement de Dieu en ce qui vous concerne... Mais je vous *vois* sourire. Si vous sachiez comme j'entre facilement dans votre état d'esprit ! Oui, j'ai pensé à vous, je pense souvent à vous. Votre *parti pris* me paraît ce qu'il y a de plus tragique, dans le monde actuel. Votre « cas » a une signification qui me fascine.

Si je ne vous ai pas revu, c'est que je ne pensais pas (et je ne pense pas encore) vous intéresser. J'en juge par moi-même : un homme, même si je l'admire, m'ennuie dès qu'il a montré tout son jeu... Vous, je persiste à penser que vous avez encore une carte ou deux cachées dans votre manche... Et puis je vous aime bien.

Je n'ai pas répondu à votre lettre au sujet de mon petit article sur « *Gide et l'Évangile* ». Mon silence est un acquiescement. D'ailleurs il ne faudrait jamais parler de ces choses-là—on est sûr de trahir la vérité. Merci d'aimer *Racine*. Vous savez qu'aucune approbation ne peut avoir à mes yeux plus de prix que la vôtre. Si vous voulez me faire signe, j'accourrai avec joie. Je suis de tout cœur votre.

F. Mauriac.